

# 中山間傾斜茶園での有機栽培における 肥培管理技術の開発

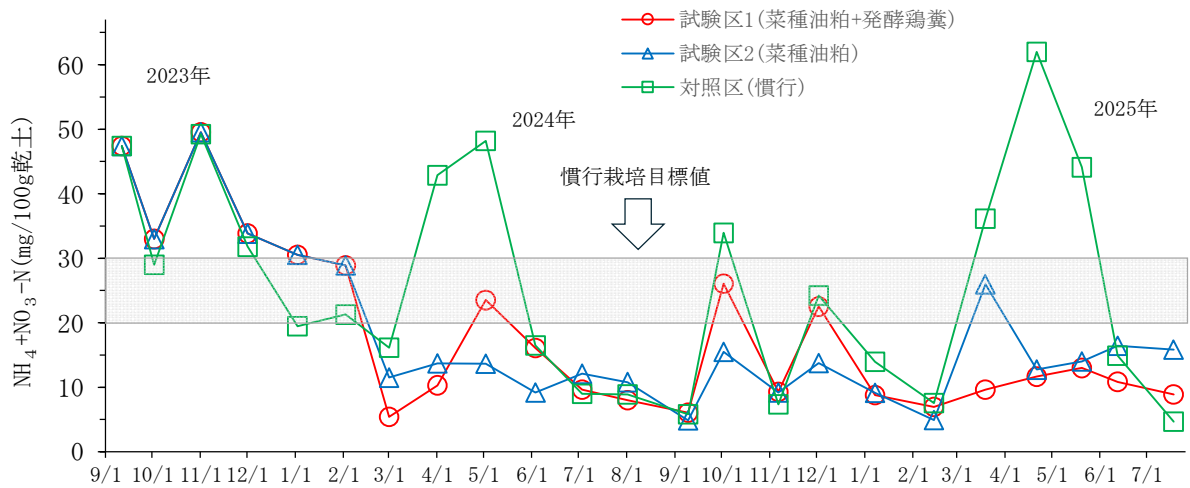


図 土壌中の無機態窒素(アンモニア態+硝酸態)の推移

表 採摘みおよび収量調査の結果

茶期	区名	2025年摘採				2024年摘採	
		採摘み調査			収量調査	採摘み調査	収量調査
		出開度 (%)	百芽重 (g)	摘芽数 (本/㎡)	摘採面あたり 収量(g/㎡)	摘採面あたり 収量(g/㎡)	生葉収量 (kg/10a)
一 番 茶	試験区1(菜種油粕+発酵鶏糞)	50	46.0	1,133	521 (116)	561 ( 91)	271 ( 79)
	試験区2(菜種油粕)	57	52.2	1,092	570 (127)	555 ( 90)	274 ( 80)
	対照区(慣行)	33	41.3	1,083	447 (100)	619 (100)	344 (100)
二 番 茶	試験区1(菜種油粕+発酵鶏糞)	65	42.5	1,104	470 ( 82)	673 (131)	481 ( 93)
	試験区2(菜種油粕)	78	49.5	1,267	626 (110)	645 (125)	528 (103)
	対照区(慣行)	73	42.3	1,346	570 (100)	515 (100)	522 (100)

注) ( ) 内の数値は、対照区を 100 としたときの割合(%)を示す

本県の中山間地における急傾斜茶園では、茶の有機栽培の安定した栽培技術は確立されていません。そこで、施肥法として発酵鶏糞と菜種油粕の利用を検討しました。

試験では、試験区1には春肥に発酵鶏糞、芽出し肥、夏肥、秋肥に菜種油粕を施用、試験区2は全て菜種油粕を施用しました。対照区では、慣行の有機配合肥料(被覆肥料入り)等を施用しました。品種は‘やぶきた’を使用し、年間窒素施用量は50kg/10aとし、2023年秋肥から実施しました。

土壌中の無機態窒素(アンモニア態+硝酸態)については、慣行栽培の生育期(3～10月)の目標値は20～30mg/100g乾土とされて

いますが、試験区1および2では、この値を下回ることが多く見られました(試験前の残留肥料のある2023年秋冬期は除く)(図)。

そのため収量の減少が懸念されましたが、試験区1および2とも顕著な生葉収量の減少は見られませんでした(表)。

また、土壌中の無機態窒素含量および収量とも、試験区1と2の間で明確な差は認められませんでした。試験結果には、ほ場の誤差が含まれる可能性もあるため、今後も経年変化を調査し、施肥体系の構築に取り組めます。

(茶業試験場 杉本篤史 0889-32-1024)